

野鳥の絵を描く楽しみ

日本ワイルドライフアート協会会員 巻島克之

私は、日ごろ日本ワイルドライフアート協会の会員として毎週3～4日は野鳥の絵を描いております。日本ワイルドライフアート協会は略称をJAWLASといい、野生の生きものを主題に主として絵を描く全国のプロ・アマの仲間約110人の会です。

わが国には花鳥画の伝統はあるものの、鳥の絵といえば鳥学者の指示に基づいて制作する標本画・細密画・図鑑画が中心で、野鳥の自然な姿や生態を自由に表現する絵を描く人はごく少ないといえます。これに反し写真の場合は、かつて生態写真と呼ばれたように野鳥の研究者や写真家が自発的に撮影して作品を制作してきた経緯があり、さらにカメラとレンズの急速な進歩と普及によって野鳥写真人口は爆発的に増加しています。

それに引きかえ、絵のほうは画材や絵の具は昔から殆ど変わりませんし、野鳥の絵を描く人がそれ程増えたと思えないのは残念なところ です。

各種美術団体の美術展も盛んですし、アマチュアの美術展もあちこちの画廊で盛んに開かれています。野鳥あるいは野生動物を主題にした美術展は私たちの日本ワイルドライフアート協会の展覧会以外には殆ど無いのではないのでしょうか。

そんな風潮の中で「野鳥の絵を描いている」という多少の自己満足に浸りながら野鳥の絵を描いて日を通すのは大変な楽しみです。しかし、今は自己満足に浸るだけでなく、野鳥を描ける環境を守っていく努力もしなければいけないのです

が、老いた身としては若い人の力に俟つのみです。

ところで、野鳥の絵を描くといっても、サギやカモのような身近な大きい鳥はスケッチも容易ですが、一瞬もじっとしていない小鳥類ではどうしても写真に頼らざるを得ません。

私も昔々野鳥の写真撮っていましたが、うまく撮れなかったため、絵を描くのも好きだったので絵に変わりました。そんなわけで、当初は昔のできの悪い写真を素材にしていろいろ再構成したり、野外で野鳥を見て確認したりしながら絵を描いてきましたが、近年は野鳥の写真の資料を提供して下さる方もいて、有難く利用させていただいています。

ただ優れた写真の場合は、どうしても写真に引き込まれてしまいます。「写真のように良く描けている。」と云うお褒めの言葉を頂くことがありますが、それは有り難い反面、苦く身にしみる言葉でもあります。いかに写真の魅力とは別に、これを離れて絵を仕上げられるかが苦心のあるところであり、また楽しみでもあります。

ともあれ、鉄道ファンにトリ鉄、ノリ鉄などいろいろな楽しみ方があるように、野鳥もトリ見、トリ撮り、トリ録り、トリ描きなど、それぞれの楽しみ方で野鳥を思い、慈しんでいきたいものです。

〈裏表紙もご覧ください〉

